

武藏野日曜集会 祈祷会

信無き我を助け給え

——マルコ伝第9章14～29節——

小池辰雄

1975年3月9日

ああ信なき代なるかな 超文化 平伏して受けとる 即神一如 絶信の信 聖名によりて命ず
祈りで御靈の充填 祈り

【マルコ9・14～29】

¹⁴ 相共に弟子たちの許に来りて、大なる群衆の之を環り、学者たちの之と論じいたるを見給う。¹⁵ 群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて礼をなせり。¹⁶ イエス問い合わせ給う『なんじら何を彼らと論ずるか』¹⁷ 群衆のうちの一人こたう『師よ、啞の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ来れり。¹⁸ 灵いすこにても彼に憑けば、痙攣泡をふき、歯をくいしばり、而して痩せ衰う。御弟子たちに之を遂い出することを請いたれど能わざりき』¹⁹ 爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』²⁰ 乃ち連れきたる。彼イエスを見しき、靈ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきてまろまわる。21 イエスその父に問い合わせ給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『おさなき時よりなり。22 灵しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさんとせり。然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』²³ イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信する者には、凡ての事なし得らるるなり』²⁴ その子の父たちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』²⁵ イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言いたもう『啞にて聾者なる靈よ、我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』²⁶ 灵さけびて甚だしく痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言う。²⁷ イエスその手を執りて起こし給えば立てり。²⁸ イエス家に入り給いしき、弟子たち窃に問う『我等いかなれば遂い出し得ざりしか』²⁹ 答え給う『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』

● ああ信なき代なるかな
では、マルコ伝9章14節から。



¹⁴相共に弟子たちの許に来りて、大なる群衆の之を環り、学者たちの之と論じいたるを見給う。

前に、ペテロ、ヨハネ、ヤコブという三人の弟子がありましたね。だから、ペテロ、ヨハネ、ヤコブと、その他の弟子たちのことです。それも一緒にやつて来て、

¹⁵群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて礼をなせり。なぜ、いたく驚いたかと云うと、キリストは9章の前半で、ヘルモン山で変貌をきたしている。もの凄くキリストは靈に満ちていらつしやるわけです。キリストが並みならぬ様相だものだから、それで、

「イエスを見るや否や、いたく驚いた」

わけです。非常にこここのところははつきりしてます。この変貌の山というのは、死人の甦りの予表ですから。これはヘルモンの山です。

¹⁶イエス問い合わせ『なんぢら何を彼らと論ずるか』¹⁷群衆のうちの一人こたう『師よ、^{おうし}啞の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ来れり。

啞の靈に憑かれた我が子を御許に連れ来た。何か靈的な——靈にはいろんな靈がありますが——その靈の作用によつて啞になつてしまつて、ものが言えないわけです。

¹⁸靈いざこにても彼に憑けば、

ひつついてしようがないと。

痙攣^{ひきつ}け泡をふき、歯をくいしばり、而して痩せ衰^{おとろ}う。御弟子たちに之を遂^おい出すことを請いたれど能^{あた}わざりき』¹⁹爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、

「信なき代」^よというのは、もう弟子も民衆もみんなダメだ、不信のジエネレーション（世代）だと。

我いつまで汝らと偕におらん、^{とも}

もう愛想をつかしてしまう。「いつまで汝らと偕におらん」なんて、キリストもちよつと捨てばちなわけです。

何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許^{もと}に連れきたれ』

イエスというひとは神学者ではないけれども、

「自分が十字架を通るまでは本当のものは来ない」

ということは一面、分かつていらつしやるんです、ちゃんと。それでありながら、この相対的な世界で、信仰の世界でも、

「もつとお前たちは端的に信じたつていいではないか

というわけですよね。そうすれば、ある程度の働きはあるはずなんだけれども、それもダメだと。

「何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れて来い」



と。

²⁰乃^{すなわ}ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痙攣^{ひきつ}けたれば、地に倒れ、泡をふきて転び廻る。

イエスみたいな非常に靈的な人物がくると、他の靈はそこで騒ぎだすわけです。それで、ある働きをする。これをひきつけさせてしまつた。癲癇のように地に倒れて泡をふいてしまつた。この癲癇現象みたいなものもやはり、靈的な作用によつて起きるわけです。この「睡の靈」と言つたつて、ひきつけるから、そうすると、ものが言えなくなる。

キリストが神の子であることを一番先に告白したのは、やはりマルコ伝5章にあつて、やはり氣違いみたいなやつ。そして、キリストのことを「神の子」と言つたものだから、「私を表すな」とキリストは言われた。普通の人には分からないです、「神の子」ということは。ところが、惡靈には分かる。やはり、靈的な次元ですから。マルコ伝5章の始めにあつたでしょ。

「⁵夜も昼も、絶えず墓あるいは山にて叫び、己が身を石にて傷けいたり。
⁶かれ遙にイエスを見て、走りきたり、御前に平伏し、⁷大声に叫びて言う『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の関係^{かかわり}あらん、神によりて願う、我を苦しめ給うな』⁸これはイエス『穢れし靈よ、この人より出で往け』と言い給いしに因るなり。⁹イエスまた『なんじの名は何か』と問い合わせば『わが名はレギオン、我ら多きが故なり』と答え、¹⁰また己らを此の地の外に逐いやり給わざらんことを切に求む。』（マルコ5・5～10）

「穢れし靈よ、この人より出でよ」

と言つて、キリストは出してしまつた。豚に入れさせてしまつたという有名な話がある。そういうように、靈には靈が見えます。

●超文化

¹⁹爰に彼らに言い給う『ああ信なき代^よなるかな、我いつまで汝らと偕^{とも}におらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我^{もと}に連れきたれ』

「ああ信なき代なるかな。お前たちの信仰は、それは信仰か

なんてやられてしまう。

まあ、とにかく、信仰は捨身でからなければダメです。まだ、みんな整いすぎている。何か文化的次元の中におさまっているところがある。

なるほど、我々は文化文明の世の中にいますけれども、信仰の世界では、その次元におさまっていたら、いつまでたつても始まらない。その文化文明的な人間の自律的な世界の直接判断の、あるいは直接思惟^{しいい}、思考のそいつた次元から抜け出なくてはいかん。出文、



化ではなければダメですから、この信仰の世界は。

そうすると、それは反文化かというと、そうじやない。超文化なんです。文化に反するのではない。文化文明の世界を超えた世界に自分を入れなくてはいけない。そうすると、今度は逆に、本当の文化の花が咲くんですが、問題はそこなんです。

たいてい、いい加減なクリスチヤンは、文明の世界について、アクセサリー的に

「私は信仰がござります」

なんてやつてている。体裁信仰です。ところが、キリストや使徒たちの信仰は、捨身でかかつてくるものです。

まあ、あの原始福音の人たちの祈りを聞いていると、やつぱり、そういういた捨身の迫りが確かにいる。我々がないというのではないですよ。だけれども、彼らは確かにその響きを持つている。本当に泣き叫ぶような祈り方をやるからね。普通の人はちょっとびっくりしてしまう。

けれども、ああいう時に、自分も泣き叫ぼうと思う必要はないですよ。その泣き叫ぶような、その中に楽に入れる。聞いていて、その中に。というのは、同じ泣き叫びでなくて、静かな世界でありながら、同じような質の中に入るという、コツが分かってきたらしいんです。私には私の在り方がある。私には私の祈り方がある。いいですよ、みんなそれぞれで。ただし、

「その次元がそういうもの凄い次元か」

ということだけが問題なんです。静かに祈つても、囁くように祈つても、泣き叫ぶように祈つても、次元が、本当に自分が捨てられているときがある。それならそれでいい。本当は、もうそうなつてくると、実は泣き叫ぶよりももつと凄い世界に入れる。ですから、バカみたいなことですけれども。あなた方もまだ若いから、あるところはだんだん通つてくる必要もあるけれどもね。まあいいです。

●平伏して受けとる

「ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん」

と。こうキリストに言わされたら、これを読んでいたら、どういうようにしてこれを受けとつたらいいか。

「さて、ひとつ、もつと信仰を強くしましよう」

なんていつて読んでいたらダメですよ。こう言わされたら、降参してキリストの中に入ればいい。

「信なき代なるかな」

と言わされたら、

「“もつともござります、自分は。ダメでござります」



と降参する。

妙にすねたり、何か妙にシユンとしちやつたり、えらく難しい顔してみたり（笑）。私は、日曜日に壇上で話しているだろ。そうすると、分かるんだよ、皆さんのが顔を見ていると。

「これは本当に受けとつているかどうか」

というのが。それは、平伏しの姿で樂に受けとつていくと、降参したという人の中に入つてくるんです、本ものが。

「私の信仰はだいぶきているんだが、もう少し信仰を強くするかな。ああ言われたんじや」

なんてな判断ではダメです。「信なき代なるかな」なんて言われたら、こっちを本当に徹底的にマイナスにして、そこに降参する。そうすると俄然、反対のもの凄い信の中に入る。それはその直ぐあとに書いてある。

²⁴ その子の父たちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』

という言葉です。この22節、この言葉がそれなんです。「われ信ず、信仰なき我を助け給え」と。これはもう少し先へいつてからやります。

●即神一如

キリストはそう言つて、

その子をもと我が許に連れきたれ²⁰ 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痙攣ひきつけたれば、地に倒れ、泡をふきてまろ転び廻る。²¹イエスその父に問い合わせ『いつの頃より斯かなくなりしか』父いう『おさなき時よりなり。小さいときからダメなんですと。

²²靈しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて「ぼさんとせり。

まあ、今の普通の医学だつたら、これはきっと癲癇でしょ。

然れど汝なにか為し得ば、我らを憫あわれみて助け給え』

「どうにもならんですが、あなたが何かおできになるのでしたら、どうか憐れんでください」と。

²³イエス言いたもう『為し得ばと言うか、

『為し得ば』なんて、ひとのことを仮定して何をぬかすか』

と。「為し得ば」なんて、

「もしあれきになるのでしたら」

なんてね。

「あなたは何でもおできになるんです」

と言わなくては。しかし、キリストは何もできない。キリストを通して神さまがするんです。



信する者には、凡ての事なし得らるるなり』
これはキリストの告白ですよ。

「私は神さまを本当に信じています。そうすると、何でもできるわけなんです」

というのが、この裏の言葉です。「為し得ば」なんて言つてはいるのではない。

「神さまを信する」

というのは、全く信頼することです。神に全托し、自分を即神、神に即さしむ。神に自分を投げ捨てて、即神、即の世界に入ると、一切ができるようになる。

「火渡り」とか、「潔め」とか言うが、これが私たちのいわば火渡りなんです。

「神に自分を投げ入れる」

ということ。神に本当に自分を投げ入れることが、神という靈火の中に自分を入れることですから。神という靈火の中に本当に自分を入れる。そのためにはじつと30分でも1時間でも祈つていいですよ。全身が本当にその現実か。私は即神しているか。あるいは時間的に入れるかもしれない。要するにいろいろですけれども。

それは、いつも申し上げているように、十字架なんです。キリストの十字架を瞑想して入る。さつき歌つた讃美歌39番に、十字架を瞑想してどうのこうのという。

「十字架のくすしき光

閉する目にあおがしめ

みさかえにさむるまで

主よ、ともに宿りませ

と書いてあつたでしょ。閉する目に十字架の事態を祈るという。私はさつき讃美歌を聞いていて、あそこが一番グツときた。

今朝も言つた、ガラテヤ書2章20節。そこへくると、これはもう卒業できないんです、我々は死に至るまで。もう限りなくそこへ深く入るだけです。そうすると、自分がなくなつてしまふからね。これが本当に「信する」です。「信入」といつか言つた。信じ入る。信入していくと、すべてのことが為し得られる。

「為し得られる」と言うと、

「果たしてできるだろうか?」

なんて、すぐまたそう思う。

「そうでない場合もあるじゃないか」

と。今頭はみんなそういうふうに働くね。

「例外もあるじゃないか」

と。そんなんだらない考え方をしないでください。

「信する者にはすべてのことが為し得らるなり」

というこの断定的な言葉。現象的にはできないかもしれませんよ。しかし、できない現象



の相対的現象の奥の世界で、「できる」という、「できている」という世界を受けとつていってください。

これがもう一番凄い信仰の世界なんです。それが私の言っている根源現実です。根源の現実ではすべてのことが為し得る。本当に受けとつていれば、為し得ているんです。相対的現象面では、まだ未完成であり、為し得ないかの「とく」であつても、もうひとつ奥の世界では為し得ている。

癌にかかつた。癌は死病である。けれども、キリストの生命を本当に受けたれば、癌という現象がなおそこにあつても、それに打ち勝った靈体の健やかな世界を受けとつてい。る。勝つているんです。相対的な自分が死んでも、死なない。それだけのところを本当に受けとつていきたいんです、我々の信仰は。だから、「信する者にはすべて為し得る」

と。キリストはその根源現実と相対現実が一つになつている畏ろしいひとですけれども。

●絶信の信

²⁴その子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、

「われ信ず」は「クレドー」「ピステオー」という。

信仰なき我を助け給え』

これが、私が言つてゐる絶信の信ということ。自分の相対的信仰なんか問題とならない。もうしようがないです。雲が来たり去つたりするように、そういうフラフラな信仰なんてものは、あれどもなきが^{りき}ときで、そんな信仰はもう問題にならない。ということが、

「信仰なき我を助け給え」

ということ。そして前の、

「我信ず」

が非常に力強い言葉になる。「我信ず」と言うときに、この「我信ず」という言葉が本当に力を持つためには、神さまの本願の信を受けとつていないと、この「我信ず」が力にならないですよ。ただの力みになつてしまふ。奥で、

「私は、お前がどんなものであつても、お前を捨てないぞ。人に何と言われても、

私はお前を救うんだ」

という神さまの絶対恩寵の中に入ると、この「我信ず」がもの凄い力になる…（異言）…。もう私は異言になつてしまふ。それが「我信ず」です。

「信仰なき我を助け給え」

と、もうあとは楽に。もう、「我信ず」だけでもいいくらいなもので。これが自分の相対的信仰に絶した信の世界。本願即悲願の世界です。ちょうど、今日の午前のお話にこれは相呼応するところで、いいところです。



●聖名によりて命ず

²⁵イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言いたもう『啞にて聾者

なる靈よ、我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』

これを、私たちは、信仰の世界でキリストと同じことが言えなくてはいけないんですよ。

「我なんじに命ず、聖名によりて命ず」

と。これは我々は、

「聖名によりて命ず」

と言わなくてはいかん。

「我、聖名によりて命ず、この子より出でよ。重ねて入るな」と。私は療養所やなんかで、しばしばこれをやつた。泡をふいやつたりなんかするものな。それから、お母さんの靈が入つちゃつてているのがあつた。お母さんが入つてているものだから、その人が精神的に成長しない。肉体的にもうまくない。これはN君の奥さんに入つていらつしやつた病室の隣の病室の話だ。KさんとN君の奥さんと入つてている部屋でお話したら、私は声がでかいものだから、隣の部屋に聞こえてしまつて、そしたら、隣の部屋に伝道してしまつた、自然に。それで、

「こつちへ来てくれ」

というわけで、そつちに行つて話した。甲の人が、

「夜になると、乙の人が妙な声を出す。乙の人の普通の声でない声を出す」というから、

「どういうことですか？」

なんて、乙の人の生い立ちを聞いたら、

「お母さんが自分の13歳のときに、非常に私を愛して惜しんで死んでしまつた」と言う。それで、私はピンときた。ああ、お母さんの靈が来ているなと思った。

「それはお母さんの声でしょう」

と。言う人は分からないんですけども。お母さんがこの人の中で苦しんでいる。だから、私はその人に手を置いて、

「お母さん、お母さん。ご心配いりません。この人はキリストのお助けによつて、充分これからいきますから。聖名によつて、お母さん、どうぞ天界へいらっしゃつてくれください

と、執り成したんです。お母さんは天界へ行つてしまつた。その晩から何も言わない。翌朝、痰をたくさん吐いたという。

私はちつとも靈的な男ではないけれども、そういうことを聖名によつて本当にしたら、そういうことになるからね。それでこれが、

「聖名よつて命ず。この子より出でよ。重ねて入るな」



というわけですね。で、その人はだんだん良くなつたという話です。それから先のことは知りませんけれども。

●祈りで御靈の充填

²⁶靈さけびて甚だしく痙攣はなはけさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言う。

そうなんですよ、ガタンとなつてしまふ。へタすると、だんだん冷たくなつてしまふ。御靈でもつて息を吹き返させないとね。

²⁷イエスその手を執りて起こし給えば立てり。

それはキリストですから、すぐ聖靈が入る。生命を入れてしまふ。それで、立つたと。放つておけば、これは死んでしまう。

御靈の世界は、とにかく、キリストに祈ることです。自分の自信ではない。キリストはすべてを為したもうから。キリストに祈れば、必ず勝つ。

時々お話したように、呪われた人を助けたこともあつた。この頃はどうもそういう妙な現象が起きないね。起きたら、やるけれども(笑)。あの頃は本当にいろんなことがあつたよ、昔は。どうして、あんなにいろんなことがあつたかな。

「ヘビが食いつく」

なんて言つてね。祈ると、天から銀の剣が下りてきて、ヘビの口にはさまつてしまつて食いつけなくなつたとか、いろんなことを言うから、おもしろいなと思った。ヘビというのは、あれはとにかくサタン的な動物だよね。あれをいい加減に殺すといかん。とにかく、生き物を殺したら、必ず——南無妙法蓮華經や南無阿彌陀仏ではないけれども——キリストの聖名によつて執成すといい。生き物というものはみんな靈があるから。

²⁸イエス家に入り給いしとき、弟子たちたぐい竊ひそかに問う『我等いかなれば遂い出し得ざりしか』²⁹答え給う『この類よは祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』

「祈に由らざれば」というのは、キリストは、「命ずる」なんて言つたつて、もう必ず奥の方でパツと祈りの世界に入つていらつしやるわけですね。

だから、普段やつぱり、祈りの世界で魂が御靈によつて充填じゅうてんされてなくてはいかんですよ。祈りが抜けていたら、もうダメですから。聖書を読むことが同時に祈りであるような読み方をしないと。とにかく、聖書を読んでいて、生命が来なかつたら、本当の祈り心で読んでいない。頭で読んでいる。祈り心で自分をその中に突入させて——信入だからね——信入しながら読んでいれば、読むこと事態が祈りなんです、その中でもつてグーッときてみるとね。だから私は、「もう話すのが面倒臭くなる」



なんて、申し訳ないことを言うんだけれども。
そういうわけで、今日はこの、

「我信ず、信仰なき我を助け給え」

というところと、それから、

「信する者はすべてのことを為し得るなり」

と。この二つの句の本当の中身をちよつと申し上げました。大事なことですけれども。

●祈り

祈ります。二千年前のイエス・キリストさま。今もなお、二千年を越えて、私たちにこの御言を通して、直々の現実として迫りたもう、この不思議なことを感謝し奉ります。

主さま、本当に、いついざこにおきましても、心の、魂の底から聖名を呼び奉れば、あなたは直ちに私たちに答えたもう。そして、「主よ！」と全身をあなたの中に投げ入れるときに、「我信ず」ということの本当の事態が、あなたのこの掴みかかり、呼びかかりによりまして、受けとることができ感謝です。

かくして、「我信ず」ということが、力みでも何でもなく、

「我信ぜざるを得ず」

と本当にかく言わざるを得ません。

主さま、どうぞ、私たちはその信より、また「信仰より信仰へ」とは、実にそのようにして、「あなたの中へと中へ」

と進んでいくことが、「信より信へ」であることをいよいよまた受けとり、このことはまた本当に、あなたのご愛を、私たちに力あるところのあなたの聖靈の御愛を受けとることであることが直ちに即して、感謝です。

どうぞ、いかなる時も、絶対に行き詰まることなく、また決してうろたえることなく、この根源現実においていつもあなたと共に勝つてまいります。どうぞ、そのようにして、主さま、勝ちにまた勝つて、「雄々しかれ」とは正にあなたの中に入ることが本当の雄々しさであることを受けとり、感謝です。

どうぞ、この兄弟姉妹たちが、あなたのご愛の溢れる存在とせられ、泉の如くに、主さま、私たちはあなたの愛の源泉滾々たるところの事態をいよいよ身をもつて証し、隣人を助け温め救つていくことができますように、切に願い奉ります。私たちの人生の本当の意味は、ただ人を助けることだけです。

どうぞ、人助けが本当の意味においてできる、その聖靈の器としていよいよ私たちを自由自在にお用いくださいらんことを、またお鍛えくださいらんことを切に願い奉ります。

心からの感謝と讃美、今、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により獻げ奉る。アーメン。

